

ハムゾン シトゥモラン
HAMZON SITUMORANG

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文第 229 号
学位授与年月日 平成18年3月9日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 外来宗教の受容に関する比較研究
—バタックと日本におけるクリスチャンの死者儀礼をめぐって—

論文審査委員 (主査)
教授 鈴木岩弓 教授 嶋 陸奥彦
助教授 木村敏明

論文内容の要旨

すべての生命をもつ存在は死ぬ運命にある。生きることは死へ向けてのプロセスであるときえ言うことができる。そのような中で人間の死を特徴付けるのは、人間はただ死ぬだけでなく、死ぬとはどのようなことか、またそこから反照して生きるとはどのようなことか考えずにはいられないということである。言い換えれば、人間は死生観をもち、自他の死をめぐる振る舞いは、このような死生観の影響を多かれ少なかれ受けざるを得ない。

一方、このような死生観は文化的な多様性をもつ。とりわけ、いわゆる靈魂観に関し、靈魂の有無や数、肉体と靈魂の関係、死後における靈魂の行方などの点において、世界の各地にバラエティ豊かな観念が分布していることは、これまでの宗教学、文化人類学などの業績に明らかである。このことは、先述のごとく、死をめぐる実践の形態にも多様なバラエティをもたらしている。とりわけ死者、遺体をいかに扱うか、という問題にはこのような死生観が最もナイーブな形で関わってくる。具体的にいえば、遺体の処理の仕方、葬送儀礼のあり方は、当事者たちのもつ死生観が最もよく反映された部分であるといえるのである。

また、このような死生観や死者儀礼のあり方が、宗教と深いかかわりをもつということは、いまさら繰り返す必要もないであろう。とりわけ、仏教やキリスト教、イスラームといった、比較的整備された教義体系を持つ宗教にあって、死の問題は宗教上非常に重要な主題として集中的に教義や実践形態の整備普及が進められてきた分野である。そしてこれらの宗教は、布教・伝道活動を通して、世界の各地にそれぞれの死生観なり死にまつわる実践形態なりを伝え、根付かせる試みを今日なお続けている。

このことから生じてくる問題として、それぞれの社会にあって歴史的に形成され、再編をくりかえし

ながら伝承されてきた「伝統的」（以下では煩瑣となることを避けるため「」をつけずに用いる）死生観や実践と、布教・伝道によってもたらされたそれらとがいかに関わっているのかということがある。両者が説くところの死生観や提唱するところの実践の形態はほとんどの場合一致せず、場合によっては厳しく対立するからであり、このような中で前述のような宗教に帰依した者たちは時に深刻な葛藤の中に身をおくこととなる。しかし、このような状況の中でも人は死ぬ。死ねば、何らかの形でその人を葬らなければならない。本研究は、キリスト教を受容したアジアにおける二つの社会を題材にして、このような死者儀礼の場面においてキリスト教的死生観と伝統的死生観がいかなる関わりにあるかを比較検討する試みである。

従来、宗教学においてこのような問題は、「シンクレティズム」という枠組みで捉えられてきた。それらに対して、本研究の特色は次のような点にある。まず、対象を死者儀礼に限定し、その実践においてキリスト教的なものや伝統的なものがいかなる形で関わりあっているのかを詳細に明らかにする点である。このようにすることにより大局的な視点からの類型化によって見落とされがちな側面も研究の視野に入れることができると考える。また、比較という方法を取り入れ、アジアにおける二つの社会を題材に選んだことも本研究の大きな特色である。キリスト教世界においてはどちらかといえば周縁に属するこの二つの社会を比較するということは、「正しい」（欧米の）キリスト教対「逸脱した」キリスト教という対比で論じられがちであったこれまでのシンクレティズム論に対し、欧米のキリスト教もそれ以外のキリスト教もそれぞれが対等な「多様なキリスト教」の一つのバージョンであるとする見方を導入する手がかりを与えてくれるものであるように思われる。

本稿でとりあげるバタックのクリスチャン社会と日本のクリスチャン社会は、ともにキリスト教の歴史においては周縁地域といえるアジアに位置し、ほぼ同時期の19世紀後半に欧米からの宣教師が本格的に活動を開始したという共通点を持つ。また、両者はともに祖先崇拜の信仰および、それと深く結びついた社会・親族システムを持ち、キリスト教の受容においてこのことが非常に大きな問題となってきた点も同様である。

しかしこのような共通点の一方で、両社会ではキリスト教の受容され方に非常に顕著な相違点も存在している。なによりまず、バタックにおける伝道活動は伝道史上まれに見るとまでいわれる成功をおさめ、その大半が今日ではクリスチャンとなっているのに対し、日本における伝道活動についてはその信者数だけをみれば成功したとは言いがたい状況である。また、旧来の文化とキリスト教的文化をどのようにして関係付けていくかというやりかたについても、両者の間には大きな違いが存在している。

このように、両社会はキリスト教の受容に関して多くの共通点を持ちながら、今日の状況を見ると大きな違いが存在しており、両者の比較は、アジアにおけるキリスト教の受容という問題を検討する上で非常に大きな意義を持つと考えられる。

人口数百万のバタックと日本というのは、集団の規模という点で比較の母集団としては、適切さを欠くのではないかと、という指摘がなされることが当然予想される。しかし、インドネシアは、1945年にはじめて統一国家としてのまとまりが成立し、インドネシア語が公用語として普及したのもそれ以後のことにはすぎない。それ以前は基本的に言語も社会・文化システムも異なった多様な集団がインドネシア各地に分散して生活していたのである。キリスト教の受容がとりわけ19世紀の後半から20世紀の初頭にかけておこなわれたことを考え合わせれば、日本のような文化的まとまりと比較する単位としてはインドネシア全体よりも、そのような集団のどれか一つをとりあげることが適切であると思われる。このような理由により本稿では、日本のクリスチャンとバタックのクリスチャンを対象として比較考察をすすめていくことにする。

第一章 キリスト教受容史の概要

第一章ではバタック社会と日本社会におけるキリスト教の受容プロセスを時間軸に沿って整理し、その比較を試みた。両社会共に、キリスト教の受容は19世紀半ば過ぎで、欧米社会との本格的な交流開始と共に始まっている。バタック社会では、スマトラにおけるオランダの影響力拡大を背景に、1861年にはじまるドイツのライン宣教会(RMG)の布教活動によってキリスト教が受容された。また、日本では、16世紀のカトリックを別にすれば、やはり同時期の幕末から維新にかけての鎖国政策の転換がキリスト教受容の大きなきっかけとなっている。その後バタック社会では、第二次大戦により欧米社会の影響力が低下する中、バタック主導の民族教会HKBPが確立し、バタックの大半がキリスト教に改宗していく。そして戦後になると今度は、他教派の伝道活動や分派運動により、教会が多様化していく傾向を見せるようになった。一方、日本のキリスト教も第二次大戦期に、バタック社会とは全く違った政治的理由においてではあるが、日本基督教団という大きな教団へとまとまった。しかし特に戦後におけるその伝道活動にも関わらず、結局日本社会においてキリスト教が全面的に受容されているとは言いにくい。この点はバタック社会と日本社会の大きな違いであるといえる。

第二章 社会構造の比較

第二章では、バタック社会と日本社会の社会構造の比較考察を、それぞれを特徴付けるグリハンナトル制度とイエ制度を中心的にとりあげつつおこなった。バタック社会ではマルガと呼ばれる父系の出自集団が社会関係において最重要のまとまりをなす。しかしバタックの社会構造を特徴付けるのはこのようないわばタテの関係に加えて、姻族集団とのヨコのつながりである。つまり、自己の一族(suhut)に対し、妻の与え手集団(Hulahula)と、妻の受け手集団(Boru)にあたる人々との関係が重要で、この三者は常に心を合わせ協力していくべきものとされ、鍋を支える三つの石(Dalihan na tolu)にたとえられるのである。とりわけバタックの人生儀礼やその他の慣習法儀礼においてはこの三者間における象徴財、労力、現金などの交換、中でも妻の与え手集団による主催者への祝福(Pasupasu)が不可欠である。一方、日本社会の構造を考える上で最も重要なまとまりはイエであろう。イエはその成員という面から見れば、マルガと異なって出自原理だけで結ばれた集団ではなく、非血縁者も含む複雑な性格をもつ。そして生活的な機能と並んで祖先崇拜のような宗教的機能の担い手であることが重要である。また歴史的変遷をたどる中で、明治の家族国家観に顕著であるように、家族範囲から、集落、国家とイエの機能を担った集団が個人を重層的に包み込む入れ子細工的な社会構造が日本の社会には成立した。

クリスチャンの人間関係を見ても両社会には違いが見られる。現在のバタック社会では地縁、血縁、職縁等に基づいたキリスト教的同信組合が人間関係の構築維持に関して重要な役割を果たしている。これらはクリスチャンであれば教派を問わずに成員となることができ、月に一度程度の祈祷会と儀礼における相互扶助をおこなっている。これに比べ、日本のクリスチャン間の人間関係は、それぞれの教会を単位としたものがほとんどであり、教派間、教会間でのものはあまりみられない。

第三章 霊魂観

本章は二つの部分からなる。まず最初の部分では両社会の伝統的霊魂観をとりあげ、それらとの対比でキリスト教的霊魂観に言及した上で、それらを比較対照した。バタックの伝統的な霊魂観では、生者はトンディ(tondi)という霊魂をもつが、死と共にそれはベグ(Begu)という死霊に変わるとされる。このベグは生者に対し良い影響ばかりではなく、むしろ病気などの悪い影響をもたらす存在と考えられている。しかし子孫がその数の多さ(Hagabeon) 経済的豊かさ(Hamoraon)そして社会的名声

(Hasangapon) を達成し繁栄することで、ベグは死者の世界で次第にその地位を上げ、終には子孫たちによる改葬儀礼 (Mangonkal Holi) を通してスマンゴット (Sumangot) あるいはソンバオン (Sombaon) へと祀り上げられ、子孫たちを守護する存在に変わると考えられる。日本にあっても、バタックと同様に死と共に肉体を離れる霊魂の存在が信じられている。また、死者の霊が段階をふんで「祖霊化」のプロセスをたどることが知られ、これが生前におこなわれる人生儀礼とパラレルな構造を持つことが指摘されている。しかしその祖霊化のための要件として日本では子孫たちによる「供養」、とりわけ決められた年忌におけるそれが重要であるとされている点はバタックと大きく異なる点である。

次に両社会におけるクリスチャンの霊魂観の実態を明らかにするためにおこなった、クエッションネア法による調査結果の分析をおこなった。その結果霊魂観に関して言えば、その所在や扱いをめぐる、両社会のクリスチャン共に伝統的な考え方とキリスト教的な考え方の間で揺れ動いていることが分かった。

第四章 葬儀

本章では、バタック社会と日本社会におけるクリスチャンの葬儀の形態に関する比較考察をおこなった。ただし、日本社会において現在クリスチャンが非常にマイノリティであることを考慮し、日本の事例に関しては伝統的な葬儀形態とクリスチャンの葬儀形態の双方をとりあげることとした。また、一般的な儀礼の手順の記述に加え、より実態に即した考察をおこなうため、両社会においていくつかの具体的事例をとりあげて検討した。

現在のバタック社会におけるクリスチャンの葬儀にあつては、慣習法的な式とキリスト教的な式とが峻別され、並存している。その大まかな流れは次の通りである。①弔問、準備。葬儀は通常死後数日を経ってからおこなわれるが、その間も死者や家族が所属する多様な機能集団、とりわけ上述の同信組合の弔問客が家を訪れる。その場合、キリスト教式の祈りや賛美歌を中心とした簡単な式がおこなわれる。またこの時期に主要な親族で儀礼の大枠を決定するパンガラポタン (Pangarapotan) もおこなわれる。②埋葬当日。A. 埋葬前の慣習法的葬儀。まずは、参列した多様な妻の与え手集団 (Hulahula) が、死者あるいはその親族にウロス (Ulos) と呼ばれる特別な布の贈与や踊り (Tortor) を通して祝福 (Pasupasu) をおこなう。その後出棺儀礼 (Maralaman) がおこなわれ、庭に運び出された遺体の頭側に米と7種類の植物を入れたかご (Sijagaron) がおかれ、その周りで参列者たちが集団ごとに順番に踊る。B. キリスト教的な式。その後、自宅あるいは教会で、キリスト教的な式がおこなわれる。この式では、牧師の説教、賛美歌、祈りなどがおこなわれる。その後遺体は墓地に運ばれ、埋葬された後、牧師の導きのもと簡単な式がおこなわれる。C. 埋葬後の慣習法的儀礼。埋葬後には近い親戚だけが遺族の家に集まり、死者の配偶者を対象とした二つの儀礼がおこなわれる。一つは儀礼の間、死者の配偶者の頭をおおっていたツズン (Tudun) という布を脱がせる儀礼である。これはかぶせることも脱がすことも、妻の与え手集団に属する人によっておこなわれる。もう一つは、死者が女性であるときにだけ、財産分けの儀礼ウンカップ・ホンブン (Ungkap Hombun) がおこなわれ、女性の親族が夫に財産の分与を要求することができる。③埋葬当日以降。埋葬の翌日、遺族は墓にもどり、前記のシジャガロンに含まれていたオンブ・オンブ (Ompu-ompu) という植物をそこに植える。埋葬後三日目から十五日目まで、様々な親族が遺族の家を、料理を持って訪れ、小さな儀礼がおこなわれる。これはその料理の名前をとって、「苦いもの」シパエットパエット (Sipaetpaet) と呼ばれる。

日本の葬儀は、地域的にあるいは死者や遺族の宗教や信条によりその形態に違いがあり一概には言えないが、類型的に見て、通夜、葬儀、火葬、供養の四つの部分からなると考えてよいと思われる。①通夜。かつては家族や近親者が死者と最後の夜を過ごす儀礼であった。しかし現在では、遺族と関わりの

ある多くの人々が参列し、哀悼の意を表す式となり、時間も夜の十時には終了することが多くなった。通夜では食事や酒や茶菓子が振舞われ、読経や玉串の奉奠などもおこなわれる。②葬儀。通夜の翌日、火葬と同じ日におこなわれる。火葬終了後に葬儀がおこなわれることも近年では多い。この部分は最も直接的に僧侶などの宗教者が介入し、宗教や宗派によってその内容が大きく異なる。③火葬。出棺式のち、遺体は霊柩車で火葬場まで運ばれ、棺ごと焼かれる。その間、炉の前には花が飾られ、線香がたかれる。一時間ほどで火葬が終わると、竹で作られた箸を用い、二人一組になって会葬者は遺骨を拾い、骨壺におさめる。骨壺は白木の箱におさめられ、遺族はそれを家に持ち帰って、仏壇前の白布をかけた小机の上に位牌、遺影とならべて安置する。火葬場からそのまま墓へと埋葬することもあるが、このように家に持ち帰ることも多く、その場合後日改めて埋葬がなされる。④供養。死後七日目（初七日）より四十九日まで七日ごとに死者に対する供養がおこなわれる。その後も、春と秋の彼岸、盆、命日などには死者に対する供養がおこなわれる。

日本のクリスチャンの葬儀もこのような伝統的な形態と外見上は多くの共通点をもつ。クリスチャンの葬儀の一般的な形としては、①通夜式②出棺式③葬儀式④火葬式⑤埋葬式といった順番でおこなわれる。これらは、先に説明した伝統的な葬儀のスタイルと大きく異なるものではない。もちろん、それらの意味づけは大きく変えられ、死者への崇拜や供養に関わる部分は慎重に排除されている。また、埋葬後の死者との関わりについても、もちろん死者祭祀ではなく遺族の信仰強化のためという留保の上であるが、かつては埋葬後三日目、七日目、三十日目に祈りの集いがおこなわれ、現在でも墓参りをする習慣がある。

第五章 クリスチャン墓地

本章では、バタック社会と日本社会におけるクリスチャン墓地の形態を、墓石の形状やそこに記された言葉や象徴などに注目しながら比較し、両社会におけるキリスト教受容のありかたを比較考察する。

バタックの墓には二種類あり、まず、死者は個人墓に土葬される。その後、数年から十数年後、その遺骨は掘り返され、一定範囲の出自集団によって合葬墓に保管される。後者の合葬墓はかつて集落内に作られていた遺骨の保管小屋（Parholian）に由来し、セメントや陶器が用いられるようになってからはタンバック（Tambak）と呼ばれるようになった。多くの親族を集め大規模におこなわれる改葬儀礼ともども、このような改葬の習慣は、キリスト教の側から異教的であるとして攻撃の対象となっている。しかし今日でもなお、多くのバタックはこのような習慣を捨てずにいる。これらのうち、本章でデータとしてとりあげるのは、前者の個人墓の方である。

本章でとりあげるのは、メダン市内の公営墓地にあるクリスチャン・バタックの個人墓312基と、日本の仙台市北山クリスチャン墓地の277基である。キリスト教的な象徴に関していえば、十字架が刻まれた墓石の割合をみると、バタックが一例を除いたすべてに見られたのに対し、日本では48.73%（277基）であった。一方、聖書の語句が記入された墓はバタック社会で24.6%（78基）、日本では29.6%（82基）であった。バタックの墓にみられるキリスト教以外の象徴としては、子や孫（子=17.0%、孫=40.1%）の名前、学歴（12.3%）や職業（3.7%）など、現世での成功を誇示する目的をもったものが目立つ。一方日本のクリスチャン墓地では、家紋（48.3%）、香炉（29.6%）など、かつてイエ観念や祖先崇拜と結びついていた象徴が比較的多く見られた。

結論

本論ではクリスチャン社会をバタック社会と日本の社会において比較することを試みる。そこには3

つの要素、つまり、日本の葬儀の考え方とバタックの葬儀の考え方とキリスト教の教義的な葬儀の考え方が含まれる。そして「キリスト教的とバタック的なものの混淆した葬儀」と「キリスト教的と日本的なものの混淆した葬儀」のそれぞれの二つの文化混淆の形態の違いを明らかにするのがここでの目的である。

そのためにここでは、伝統的要素とキリスト教的要素の混淆の仕方に五つの形態があると仮定する。つまり「付加」、「削除」、「重複」、「部分選択」、「全選択」である。

1) 付加

「伝統的な文化に欠けている要素を伝来の文化から取り入れる」形態である。

a. バタック

ー葬儀

クリスチャンバタックの死者儀礼では、伝統的な葬儀もクリスチャン的な葬儀も両方行なわれる。葬儀の一連の流れでは、先ず伝統的な葬儀を行ない、その後キリスト教的に行なわれる。伝統的な儀礼では、ダリハンナトルにあるフラフラの考え方が優先される。そして、キリスト教的な葬儀の時には牧師の指導が優先される。つまり、時間と場所によって伝統的儀礼とキリスト教的儀礼が分離して両方行なわれる。そのため、今までの伝統的文化に伝来の文化が「付加」されていると言える。

ー墓

クリスチャンバタックの墓には、伝統的な現世的成功に関する価値観の象徴が見られるが、それとともにキリスト教の象徴も見られる。つまり「付加」の形態であるといえる。

b. 日本

ー葬儀

キリスト教葬儀は牧師が導く。信徒としての遺族は、牧師の導きあるいは教会の規則に任せることとなる。したがって、キリスト教的な葬儀か伝統的な葬儀かの二者択一を迫られることとなり、「付加」の機会がない。

ー墓

日本のクリスチャンの墓には、「付加」がしばしば見られる。例えば、墓を構成する装置やそこに記された要素においてである。クリスチャンの墓では、香炉と家紋を十字架と聖書の一節を一緒に付ける事が多々ある。これは、「付加」の形態である。

2) 削除

「伝来の文化に合っていない伝統的な文化を消滅させる」形態である。

a. バタック

ー葬儀

バタックの葬儀には、「削除」的な形態は見つからない。マガンドウンと言う泣き方も、現在まだ続いているが、執行される時間だけが変わって、参列者が来る前の早朝になっている。

ー墓

クリスチャンバタックの死者儀礼においては、タンバックという伝統的な改葬墓はもともとは死霊の位を高める目的であった。しかし、現在は信仰としての意味が希薄化し、捧げ物を与えることが見られなくなった。これは、子孫がキリスト教化し、以前の信仰が消えてしまったということであろう。その場面に「削除」が見られる。

b. 日本

－葬儀

日本のクリスチャンの葬儀では、死霊崇拜に関するものだけを消滅させ、あとの日本の習慣、例えば参列者の扱い方や遺族のところへ持っていく手当（香典）と挨拶の仕方は伝統的なやり方そのままを踏襲するという面で「削除」が見られる。

－墓

日本のクリスチャンの墓には伝統的な物を使わず、新伝来の文化の印だけを使うものもある。十字架や『聖書』の文章を記入することがその例である。

3) 重複

伝統的な文化と新伝来の文化を両立的に使う形態。

a. バタック

－葬儀

バタックの葬儀式では、キリスト教的な葬儀をする前にまず遺族宅で伝統的な葬儀式を行なうのが普通である。このように、一人の死者に対し伝統的な葬儀とキリスト教的な葬儀の二種行なわれ、「重複」が確認される。

－墓

クリスチャンバタックの墓には伝統的な要素だけ見られる。死霊崇拜の象徴は、ガジャマダクリスチャン墓地で見ることができなかった。

b. 日本

－葬儀

日本の葬儀式では、キリスト教的な葬儀を選ぶと牧師が指導するので、キリスト教に反する伝統的な葬儀は禁止される。そのために「重複」の形態は日本のクリスチャンの葬儀には見られない。

－墓

日本のクリスチャンの墓には、伝統的なものもキリスト教的なものも両方一緒に付けることが多々見られる。

4) 部分選択

意味は「伝統的な文化が半分と新伝来文化が半分、あるいは互いにある部分を取り入れる」といった形態である。

a. バタック

－葬儀

バタックの葬儀には「部分選択」の形態が見られない。なぜなら二カ所で行なわれるので、アダットの伝統的な葬儀には牧師の監督がいないからである。他方、教会での葬儀の時には牧師の主導によって行なわれるので、グリハンナトルの社会の組織は使用されない。

－墓

クリスチャンバタックの墓にはクリスチャンの印も、伝統的な印も見られる。つまり、「部分選択」の形態が見られる。

b. 日本

－葬儀

日本のクリスチャンの葬儀式には、部分選択の形態が見られる。葬式には日本的な人間関係をふまえた上で、死者と生者の関係の部分においてはキリスト教的な考え方が使用される。ここには「部分選択」の形態が見られる。

－墓

日本のクリスチャンの墓には、家紋と十字架を付けたものが、香炉と『聖書』の文章を記入したものより多く見られる。ここには、日本のクリスチャンの墓が「部分選択」の形態をもつことを示している。

5) 全選択

意味は「伝統的な文化かあるいは新伝来の文化か一つ選ぶ」という形態である。

a. バタック

－葬儀

バタックの葬儀には、全選択の混淆は見られない。葬儀にも墓にも伝統的要素とキリスト教的要素が見られる。

－墓

クリスチャンバタックの墓には、キリスト教の象徴以外の伝統的な文化影響が確認される。つまり、「全選択」の形態が見られない。

b. 日本

－葬儀

日本のクリスチャンの葬儀では、まず最初にキリスト教的な葬儀か、あるいは伝統的な葬儀かを定めることになる。現在の牧師の考え方では、出来るだけ伝統的なものを使わないようにという努力が見られる。それゆえ、キリスト教的な葬儀には「全選択」的な混淆が見られる。

－墓

日本のクリスチャンの墓には、日本の伝統的象徴、あるいはキリスト教だけの象徴を付ける墓も見られる。つまり、「全選択」の混淆の形態は日本の墓に見られるということである。

以上の考えを図示すると次のようになる。

		付 加	削 除	重 複	部分選択	全選択
バタック	葬儀	有	無	有	無	無
	墓	有	有	有	有	無
日本	葬儀	無	有	無	有	有
	墓	有	有	有	有	有

以上、日本とバタックのクリスチャンにおける葬儀をシンクレティズムと言う視点から比較してみた。その結果として次のようなことが言えるであろう。

1. バタックと日本との対照が最も際立ったのは「全選択」であり、バタックにはそれが全く見られない。
2. バタックでは「付加」「重複」の形態が葬儀にも墓にも見られたのに対し、「削除」「部分選択」は葬儀には見られなかった。
3. それと対照的に日本では「削除」「部分選択」の形態が葬儀にも墓にも見られるが、「付加」「重複」は葬儀には見られなかった。

全体として見れば、既に社会構造や霊魂観の比較の箇所で指摘したように、バタック社会ではキリスト教に重心を置きつつ伝統と共存していく傾向が見られるが、日本社会では両者が対立したまま、墓の場合のように並存したり、葬儀の場合のように二者択一を迫っているのが現状であると言えるだろう。

論文審査結果の要旨

本論文は、キリスト教を受容したアジアにおける二つの社会を事例として、キリスト教的死生観と伝統的死生観との相克を実証的に比較検討する中から外来宗教受容のあり方を解明した、これまでの研究史に見られない新たな試みである。従来の宗教学では、このような問題はシンクレティズムの枠組みの中で捉えられる傾向が高かったが、この論文はそれに対してまず、分析対象を死者儀礼に限定し、その実践を見ていく中からキリスト教的なものとの絡み合いを解きほぐして明らかにした点に特色をもつ。キリスト教教義では、一神教的考え方から死者に祈ることはあり得ないが、キリスト教受容以前のバタックも日本も死者が子孫の祭祀対象となる文化をもっていた。このような外来宗教の教義と伝統的宗教の価値観とのジレンマの解消の仕方に注目した視点は、従来行われてきたマクロな類型化からは見落とされてきた側面を浮き彫りにすることに成功している。またアジアにおける二つの社会を題材に比較研究した点も、特色の第二点である。すなわちアジア社会は、キリスト教的世界から言うなら周縁部に位置する社会であるが、ここにスポットを当てることにより、＜欧米の「正しい」キリスト教＞対＜「逸脱した」キリスト教＞といった図式の中で論じられがちであった従来のシンクレティズム論に対し、いずれのキリスト教も「多様なキリスト教」の一バージョンでしかないという、価値中立的な研究視角を確保しているものといえる。

本論文は序論と結論を含め、全体で7章から構成されている。

第1章「キリスト教史の比較」では、バタック社会と日本社会におけるキリスト教の受容プロセスを時間軸に沿って整理し、その比較を試みる中から共通点と相違点を明らかにする。両社会のキリスト教受容の共通点は、19世紀半ば過ぎの欧米社会との本格的な交流開始と共に始まった点である。しかしその後の展開におき、バタック社会では、第二次大戦時に欧米社会の影響力が低下したことを受けてバタック主導の民族教会HKBPが確立したことでバタックのキリスト教化が推進された。さらに終戦後には他教派の伝道活動や従来までの教派の分派運動が進み、バタックのキリスト教会は多様化しつつ教線を延ばしていったことが示された。これに対し日本のキリスト教も、第二次大戦期に政治的理由から、日本基督教団という大きな教団へとまとまったが、戦後におけるその伝道活動にも関わらず、クリスチャンは常に全人口の1%未満でしかない日本社会におけるキリスト教受容の状況が明らかにされている。

第2章「クリスチャン社会の構造比較」では、まずバタック社会と日本社会の伝統的な社会構造の比較考察を行い、その結果を踏まえた上でクリスチャンの人間関係の比較がまとめられる。バタックの伝統社会ではマルガと呼ばれる父系の出自集団が、社会関係において最重要のまとまりをなす。しかし彼らの社会構造の特徴は、このようないわばタテの関係のみならず、姻族集団とのヨコのつながりが大きく作用していることを指摘し、自己の一族(Suhut)に対し、妻の与え手集団(Hulahula)と、妻の受け手集団(Boru)にあたる人々との関係が、鍋を支える三つの石(Dalihan na tolu)に例えられて重要視されていることが論証される。一方、日本社会の構造を考える上で最も重要なまとまりはイエとする。イエはその成員という面から見れば、マルガと異なって出自原理だけで結ばれた集団ではなく、非血縁者も含む複雑な性格をもつ。そして生活的な機能と並んで祖先崇拜のような宗教的機能の担い手であることに要点がある。また歴史の変遷をたどる中で、明治の家族国家観に顕著なように、家族範囲から、集落、国家とイエ的機能を担った集団が個人を重層的に包み込む入れ子細工的な社会構造として成立していたことを日本社会の特徴として指摘する。以上のような特徴を持ったそれぞれの伝統社会に入ったクリスチャンの人間関係には、当然大きな相違が見られる。現在のバタック社会では、地縁・血縁・

職縁等に基づいたキリスト教的同信組合が、人間関係の構築維持に重要な役割を果たしている。この組合はクリスチャンであれば教派を問わずに成員となることができ、月に一度程度の祈祷会と儀礼における相互扶助をおこなっている。これに比べ、日本のクリスチャンの人間関係は、それぞれの教会単位に構築されるものがほとんどで、教派間、教会間を跨る人間関係の構築が希薄であることが明示される。

第3章「靈魂観の比較」は二つの部分からなる。まず前半では両社会の伝統的靈魂観をとりあげ、それらとの対比でキリスト教的靈魂観に言及した上で比較検討がなされる。バタックの伝統的な靈魂観では、生者はトンディ (tondi) という靈魂をもつが、死と共にそれはベグ (Begu) に変わる。このベグは生者に対し良い影響ばかりではなく、むしろ病気などの悪い影響をもたらす存在と考えられている。しかし子孫がその数の多さ (Hagabeon) 経済的豊かさ (Hamoraon) そして社会的名声 (Hasangapon) を達成し繁栄することで、ベグは死者の世界で次第にその地位を上げ、終には子孫たちによる改葬儀礼 (Mangonkal Holi) を通してスマンゴット (Sumangot) あるいはソンバオン (Sombaon) へと祀り上げられ、子孫たちを守護する存在に変わると考えられている。日本にあっても、バタックと同様に死と共に肉体を離れる靈魂の存在が信じられている。また、死者の霊が段階を経て「祖霊化」のプロセスをたどることが知られ、これが生前におこなわれる人生儀礼とパラレルな構造を持つことが指摘されている。しかしその祖霊化のための要件として日本では子孫たちによる「供養」、とりわけ決められた年忌におけるそれが重要であるとされている点はバタックと大きく異なる点である。後半では、両社会におけるクリスチャンの靈魂観の実態を質問紙を用いた調査結果の分析の中から明らかにする。その結果、両社会のクリスチャンにとって、その靈魂観は、その所在や扱いをめぐって、伝統的な考え方とキリスト教的な考え方との間に揺れ動いていることが明らかになった。すなわち、両社会の伝統的な靈魂観は、キリスト教的な枠組みの中では必ずしも適合せず、微妙な軋轢を引き起こしていることが示されるのである。

第4章「葬儀の比較」は、バタック社会と日本社会におけるクリスチャン葬儀の比較研究をフィールドワークを手掛かりに行った章である。とりわけバタックの葬儀に関するこのような研究はインドネシア内外を通じてほとんど知られておらず、大変貴重な研究となっている。ここでは両社会の伝統的な葬儀形態とそれぞれのクリスチャンの具体的事例に基づく葬儀形態の比較が記述される。現在のバタック社会におけるクリスチャンの葬儀にあつては、慣習法的な式とキリスト教的な式とが峻別され、並存している。その大まかな流れは次の通りである。①弔問、準備。葬儀は通常死後数日を経ってからおこなわれるが、それまでの間も死者や家族が所属する多様な機能集団の弔問客が家を訪れる。同信組合の場合、そこでキリスト教式の簡単な式がおこなわれる。②埋葬当日。(1)埋葬前の慣習法的葬儀。最初に、参列した妻の与え手集団 (Hulahula) が、死者あるいはその親族にウロス (Ulos) と呼ばれる特別な贈与や踊り (Tortor) を通して祝福 (Pasupasu) をおこなう。その後出棺儀礼 (Maralaman) がおこなわれ、参列者たちが集団ごとに順番に踊る。(2)キリスト教的な儀礼。自宅あるいは教会で、キリスト教的な式がおこなわれる。この式では、牧師の説教、賛美歌、祈りなどがあり、その後遺体は墓地に埋葬され、さらに牧師の導きのもと簡単な式がおこなわれる。(3)埋葬後の慣習法的儀礼。埋葬後には近い親戚だけが遺族の家に集まり、死者の配偶者を対象とした二つの儀礼がおこなわれる。一つは儀礼の間、死者の配偶者の頭を覆っていたツズン (Tudun) という布を脱がせる儀礼である。もう一つは、死者が女性であるときにだけ、財産分けの儀礼ウンカップ・ホンブン (Ungkap Hombun) がおこなわれる。③埋葬当日以降。埋葬の翌日遺族は墓にもどり、オンプ・オンプ (Ompu-ompu) という植物を植える。埋葬後三日目から十五日目まで、様々な親族が遺族の家を、料理を持って訪れ、小さな儀礼、シパエットパエット (Sipaetpaet) が行われる。

これに対し日本の伝統的葬儀は、地域や宗教・宗派によりその形態に違いがあるが、構造的にいうなら、通夜・葬儀・火葬・法事の四つの部分からなる。①通夜。かつては家族や近親者が死者と最後の夜を過ごす儀礼であったが、現在では、遺族と関わりのある多くの人々が参列して哀悼の意を表す場となっている。食事や酒が振舞われ、夜の十時には終了することが多い。②葬儀。通夜の翌日、火葬を済ませた後におこなわれることが多くなっている。この際には僧侶などの宗教者が司祭するが、宗教や宗派によってその内容が大きく異なる。③火葬。出棺式の後、遺体は霊柩車で火葬場に運ばれ荼毘に付される。火葬が終わると、会葬者は一つの遺骨を二人一組で拾い、骨壺におさめる。骨壺はそのまま墓へと埋葬することもあるが、一端家に持ち帰ることも多く、その場合後日改めて埋葬がなされる。④法事。死後七日目（初七日）より四十九日まで七日ごとに死者に対する供養がおこなわれる。その後も、春と秋の彼岸、盆、命日などには死者に対する供養がおこなわれる。

日本のクリスチャン葬儀は、このような伝統的な形態と外見上の多くの共通点をもつ。クリスチャンの葬儀の一般的な形としては、①通夜式②出棺式③葬儀式④火葬式⑤埋葬式といった順番でおこなわれる。これらは、上記の伝統的な葬儀のスタイルと大きく異なるものではない。しかしそれらの意味づけは大きく変えられ、死者への崇拝や供養に関わる部分は慎重に排除されている。また、埋葬後の死者との関わりについても、死者祭祀ではなく遺族の信仰強化のためという留保の上で、かつては埋葬後三日目、七日目、三十日目に祈りの集いがおこなわれ、現在でも墓参りをする習慣がある。

第5章「墓の比較」では、バタック社会と日本社会におけるクリスチャン墓地の形態を、墓石の形状やそこに記された言葉や象徴などに注目しながら比較し、両社会におけるキリスト教受容のありかたを比較した。バタックの墓には二種類あり、まず死者は死後個人墓に土葬される。その後、数年から十数年後に改葬され、一定範囲の出自集団によって合葬墓に保管される。後者の合葬墓はかつて集落内に作られていた遺骨の保管小屋（Parholian）に由来し、セメントや陶器が用いられるようになってからはタンバック（Tambak）と呼ばれるようになった。多くの親族を集め大規模におこなわれる改葬儀礼ともども、このような改葬の習慣は、キリスト教の側から異教的であるとして攻撃の対象となっている。しかし今日でもなお、多くのバタックはこのような習慣を捨てずにいる。本章では、メダン市内の公営墓地にあるクリスチャン・バタックの個人墓312基と、日本の仙台市北山クリスチャン墓地の277基の事例分析を行った。十字架が刻まれた墓石の割合が、バタックでは一例以外の全てに見られたのに対し、日本では48.7%で、日本のクリスチャン墓でのキリスト教的表示の割合が少ないことが明らかにされる。また逆に、日本のクリスチャン墓地では、家紋（48.3%）、香炉（29.6%）など、かつてイエス観念や祖先崇拝と結びついていた象徴が多く見られることが指摘され、キリスト教的影響力の浸透度合いの相違が明らかにされる。

最後の「結論」では、クリスチャン文化受容のあり方を、これまで見てきた死者儀礼を手掛かりに、明らかにすることを試みる。そこには3つの要素、つまり、「バタックの考え方」と「日本の考え方」そして「キリスト教の教義的な考え方」が含まれる。そして「キリスト教的とバタック的なものの混淆」と「キリスト教的と日本的なものの混淆」のそれぞれの二つの文化混淆の形態の違いを、伝統的要素とキリスト教的要素の混淆の仕方に想定した「付加」、「削除」、「重複」、「部分選択」、「全選択」の五つのパターンにおいて整理する。その結果、バタックと日本との対照が最も際だったのは「全選択」のパターンで、バタックにはそれが全く見られない点が特徴的であった。またバタックでは「付加」「重複」の形態が葬儀にも墓にも見られたのに対し、「削除」「部分選択」は葬儀には見られなかった。それに対し日本では、「削除」「部分選択」の形態が葬儀にも墓にも見られるが、「付加」「重複」は葬儀には見られなかったことが明らかになった。以上の分析を通じて、バタック社会ではキリスト教に重心を置きつつ伝

統と共存していく傾向が見られるのに対し、日本社会では両者が対立したまま、墓の場合のように並存したり、葬儀の場合のように二者択一を迫っているのが現状であるとする。このような外来宗教の受容構造の違いが、結果としてバタックと日本におけるキリスト教の教線拡大に見られる信者獲得の大きな違いとなって表れているとする。

本研究は、アジアにおけるキリスト教信仰の受容の問題を、宣教する側の視点と言うよりも、信者の側に立つ、従来の研究には見られなかった新たな研究視点からの試みである。筆者のもつ問題設定の斬新さ、そして文献資料や聞き取り調査資料のみならず、墓碑銘などに書かれた文字資料を駆使しての論述は、宗教学的研究の優れた研究成果として結実しており、今後の外来宗教受容の研究に貢献するものと言える。また丹念なフィールドワークにより得られた資料を用いた成果のうち、とりわけバタックのキリスト教受容に関するこの観点からの研究成果は、インドネシア国内はもちろん外国人研究者によっても全くなされてこなかった新たな分野を切り開くものであり、バタック研究の進展に寄与する非常に貴重なものと言える。

よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な視角を有するものと認められる。